春陽會ニュース

モチーフに就いて

宮田光彦

「絵とは色と形の芸術である。」というのでは足りない。「絵とは、色と形による物語りのことである。」そして物語りはモチーフと密接な関係にある。

テーブルの上にバナナがある。A君はそれを描いてB氏に見せたら、B氏は「このバナナは色がいい」が形がいけない。バナナである必要はない。バナナを取り去って何か長くまるいものを置けばよい。」と云った。A君はそこでバナナの代りに、バナナの色にそっくりな黄金色のものに描き替えた。B氏は「色も形も良くなったが、これは何かね。」と黄金色のものを指した。A君は「貴方です。」と云った。B氏は「貴方テーブルの上にあるのでは汚い。」と云った。

B氏は色と形がよければモチーフはなんでもよいと云っているのだが、モチーフが貴方では困るのである。つまりモチーフは何んでもよいのではなかったのである。テーブルの上にバナナならば一つの物語りとなったのであるが。

物語りがないと云われる抽象と云の作品にも、物語りがある。それは実に壮大な物語りである。早朝に林檎と白布とゆうモチーフの物語り。実在の観念が語る物語りを表現している。一つの思想が色彩をひいて感動を貫いているとゆう素晴しい物語りがある。

色彩のメンナールも色彩だけではない。そう休憩には、セザンヌの様式は見出せないが感覚生活の物語りが展開されている。彩色のもくもくが、そこに有る美しさが物語られる。この物語りが色彩と形を見使するのである。彼の作品にもモチーフは最そアドバイスをもつた。A君はそこでバナナの代りに、黄金色のものを描いたのである。

ポール・ヴァドル・ダリの絵画の関係は、ダリの絵から続いてきた白い卓布が、遠い日の面影を終ってダリと重れている。卵黄が卓布上にのって、卵白が白布に沿ってだらりと重れている。凄いものだ。」これは近代神経の物語る物語りである。この場合、地平線から続いてきた白布が凄いのであろう。即ちモチーフの凄さである。

静物画と一口に云っても、作家はそれぞれのモチーフを持ち、それぞれの物語りを持っているのである。

「だから自分はこう云うつもりで静物画を描いているのだ。」ゆうなら、大いに結構である。しかし、ふうもどこの展覧会に行っても、モチーフに対して厳しくない作品が多いようだ。「モチーフは何んでもよい。巧く描けばよいのだ。」と思っているのであろう。これでは物語るべき物語りを持たないのではないかと思われる。

ある人が「絵かきは、安價な使利だより静物を描いている。描かないよりはよい。しかし本当は人物を描きたいのだが。」と云っている。

モチーフとは最初の方向づけである。第一義的である。モチーフは選択され、物語りは色と形によって順調に進められるのである。情性的習慣的な制作態度から解放され、新鮮な生活感情がタブローの中に浸透するのである。

より新しいモチーフが新しい色や形を生んでゆくのである。新しい色や形が新しい未知の物語を語ってゆくのである。

研究所のありかた私感

伊藤善

求められるままに手直に述べてみます。私は以前の教場の様子も知らないし、去年も欠席した。

るのには驚いた。何をさせるにもモチーフに何の意義を見出しているのか。描かせている方が清潔ではないか。不潔を嫌って人物を描くべき吸取りをすべきではないか。絵描きだからと云って、静物画が描けるとは限らない。悪人を持ってから、悪人を描かず、気の向かない林檎を描くのが恥をかく。